
NOFree.is.Free

初音 柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NOFree . i s . Free

【Nコード】

N8392L

【作者名】

初音 柊

【あらすじ】

必然と過ぎる日々。変わらない日常。変える必要も変える力も無い自分自身。漠然と過ぎる日々、止まらない日常。それでも、笑顔が多い一日なら良い日だと思っ。

始まっていた途中

前を見れば、髪の毛長い同級生の女がいて、後ろは見なくても誰もいないと知っている。

左右にも同級生がいて、熱心に授業を聞いてはノートに黒板の内容を書き記す。

俺も、黒板に書いてある事を同じようにノートに書いている。

いつもの一日、いつものような日々、世界平和とまでは言わないが、平和な日常。

悪いとは言わない、これに不満はない。

だけど何か足りない。

そう、何か足りない。

誤字を書いてしまったので、消しゴムで消して、正解を書いた。

スタートからスタートへ

「君の事を呼んでいる、女子がいた」

無表情には無愛想が込められ、それが俺だけに見せてくれる代物だけに文句も言えない、腹立たしいけど嬉しい曖昧な感情を持つ。

「誰かに会う予定なんてない」

背の低いこいつは、斜め上の俺の目をじっと見つめている。

一生懸命に見ている感じがして可笑的。笑いはしないが。

「だから私が使い魔にされたの」

「もしかして拗ねてる？」

「別に、拗ねてない」

感情を読み取るうにも、無愛想しか伝わってこないから何も言えない。

「俺を呼んだ奴は何処に居る」

「君の教室」

「用事は」

「聞いてない」

「告白だったらどうする」

「胸が苦しい」

「無駄に素直だな」

こづいつとき、恥ずかしがったり、顔が赤くなったりするものだろう。

それでも巫女の顔は、無表情に無愛想を掛け合わせたただけで、大まかな変化はない。

普段と変わらない奴の雰囲気と言動に、安心すら感じるのは何故だろう。

「一緒に来い」

「分かった」

こくん、と頷いて俺の横を陣取った。今にも、鼻歌混じりにスキップしそうな勢い。

「嬉しそうだね」

「それはこっちの台詞だ」

「私は嬉しい」

無表情に無愛想、だけど本当に無愛想って訳では無い。

今も……無表情に無愛想。

それがこいつの当たり前なら、受け入れてやるのが、最低限俺のすべき事だろう。

「今日は家に来る?」

誰もいない放課後の廊下。巫女の静かな声でも、周りの静けさのせいか大きく聞こえる。

「なにする」

「なんでも良い」

「勉強でも教えてくれ」

「分かった」

歩く歩幅は普段より小さくしている、そうでもしないと巫女の歩幅では、足を忙しく動かさなきゃいけないから。

その気遣いを、巫女にばれないよう気をつける。

いつもならすぐに到着する教室でも、気持ち遠めに感じる。

ガララ、と教室の扉を開けた。

知らない女子がいる。

俺の顔を凝視していたが、後から入って来た巫女の顔を見て驚いている様子。

用事は、そう聞くと知らない女子は、慌てた様子で「いや、なんでもないです」と早口に言った。

それなら帰るから、俺はそう言った。さっさと教室を出たあと、巫女の顔を見た、相変わらず無表情で無愛想。

廊下を歩いていたら、

「あれ、告白だったよ」

「面倒だから早めに切り上げた」

巫女は言う。

「嘘つき、本当はあの子を傷付けたくなかっただけ」

「面倒だったから」

「君は優しいからね」

「.....」

反論するのも面倒だ、俺はそう続けて言った。

巫女は言う、君はとっても優しく過ぎる、と。

偶然から始まり

一ヶ月の終わりが、十二回繰り返すと一年が終わる。

そして今日も、新たな一ヶ月が始まった。

ざわめく教室。

席替えが行われる月の始め。

割り箸で作られたクジを取る、書かれていた数字は1。

黒板に書かれた、席の割り当てを見ると右上の角。

(まあまあ場所だな)

俺は、自分の荷物を持ってその場所に向かった。席替えは席替えだが、人が場所を変えるだけで机の移動はしない。

既に誰もいない新しい席へと座る。

窓は開けられ、涼しい風が流れて、カーテンが揺らぐ。

机の横が、壁にぴたりと付けられている、前の地主がそうしていたらしい。

簡単に下を覗き込む事が出来るか試すと、グラウンドが簡単に見えた。

特に不安も見当たらないここに、一ヶ月という時間の長さ、今までのようすぐ場所が変わるであろう一ヶ月の短さ、その両極端を心で噛み締めている。

机の中に、教科書を入れる事にした。

席替えが終わると、休み時間を終えて授業が始まった。

数学。

誰かの挨拶によって始まり、誰かが教科書を読み、誰かが黒板に書かれた問題の正解を書く。

いつもの一日。

担任の言った、問三の問題をノートに書いた。答えも書いて、他の誰かが解き終わるのを待つ。

それまでの数分の自由。

見飽きた教科書から目を離し、外の風景を眺める、と同時にグラウンドを見ると体育の授業が行われていた。

服装を見る限りは同学年。

もしかすると、と思い目を動かして探すと案の定いた。

太陽光を眩しそうに受けている巫女。遠くからでも分かる、無愛想と無表情な顔、怠そうにするわけでも機敏に動く事もせず、孤立するわけでも、団体で行動するわけでもない。

俺は知っている。

本当の独りは、誰からの慰めも攻撃もされない、干渉も影響もない状態。

それを寂しいと感じる事があっても変えようとせず、変えようとしても自分の居場所からは動けない。

ずっと独りなんだと言う、孤独を受け入れるしかない。

俺のように。

グラウンドを見渡す、配置からして内容はサッカーのようだ。

数学の授業よりは楽しいだろうと思う、その体育の授業に俺は見入った。

パスの連携もなく、攻めも守りもない。ボールに向かって全員が走るだけの、女子の幼稚なサッカー。

その中に一人だけ突っ立っている巫女。

ボールがラインを超える。

スローインした見知らぬ女子のボールは、いろいろな人のボールタッチによって巫女の足元に転がった。

「行けっ!!! 巫女っ!!!」

俺は叫んでいた。

巫女に聞こえてたかは分からない。

巫女の適当に蹴ったボールは地面をバウンドして、取り損なったキーパーに当たり、そのままゴールになった。

まぐれだ。

明らかになまぐれだ、俺は鼻で笑いつつも教室の方へ向き直すと、全員がこちらを見ていた。

「静かにしましょう」

「……はい」

自分が叫んだ事を忘れていた。

その日の帰り道。

「おい巫女」

「なに」

「今日の体育のサッカー、よくあそこから蹴って入ったな」

「見たたの？」

「見た」

「まぐれだよ」

「それでも凄かったぞ」

「……」

「どうした」

「水瀬君から褒められるのは初めて」

歩きながら巫女は、俺の手を握ってきた。

「そうか」

手を握り返す。

独りと独り。

合わさっても、独りは変わらない。だけど、寂しさは半減している気がする。

「なあ、巫女」

「なに」

「明日は暇だろ、デートでもしないか」

「……うん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8392/>

NOFree.is.Free

2010年10月28日04時19分発行